＼経済産業省「未来の教室」実証事業やEdTech導入補助金の好事例を配信するニュースレター／

未来の教室通信

Standard Vol. 12

GIGAスクール環境を活かして先生と生徒達がEdTechを使って創る、「新しい学び方」のモデルをお届け！

Vol. 12

学校×学習塾×ICTで実現する！理想の学習環境

横浜市立鴨居中学校

齋藤浩司校長　中村悟教諭

生徒が自信を持ち、学習に前向きになる「個別最適な学び」

―「チーム鴨居中」が実践するICTを利用した学習環境づくり

さまざまな事情から教室に登校することが難しい生徒たちに、個別最適な学びを提供するにはどうすべきなのでしょうか。教室に戻ってきてもらうことが正解なのか、それとも教室以外の場所での学びを充実させていくべきなのか。頭を悩ませている先生も少なくないのではないかと思います。

この悩みに対して解決策のヒントを示してくれるのが横浜市立鴨居中学校（以下、鴨居中学校）の取り組みです。鴨居中学校は、経済産業省「未来の教室」実証事業の一環として、ICTを活用し、不登校傾向の生徒たちが「教室」以外の場でも学べる学習環境づくり（学校内オルタナティブ教育）を目指し、活動を開始しました。

同校の齋藤校長は「私が赴任した2018年時点では、起立性調節障害※1などによって不登校となった生徒が30名を超えていました。そうした生徒たちへの対応を進めていくことが、赴任後の私の第一の課題でした」と振り返ります。

鴨居中学校がまず取り組んだのは、教室以外の居場所として「和（なごみ）ルーム」を開設すること。和ルームは、個別学習を柱とした居場所づくりと、個に応じた支援と伴走の場づくりを目的とした学校内特別支援教室であり、「1時間でも2時間でもいいから、教室以外の場所でも勉強できるように」との思いで作られました。これによって数名の生徒が学校に通えるようになったものの、当初は試行錯誤の連続だったそうです。

「各生徒の担任が中心となって、和ルームを新たな居場所として生徒に提案することで、少しずつ生徒が学校にいるためのサポートはできるようになっていきました。ただ、学習面でのサポートにはあまり手が回らない状況が続いていました。」（齋藤校長）

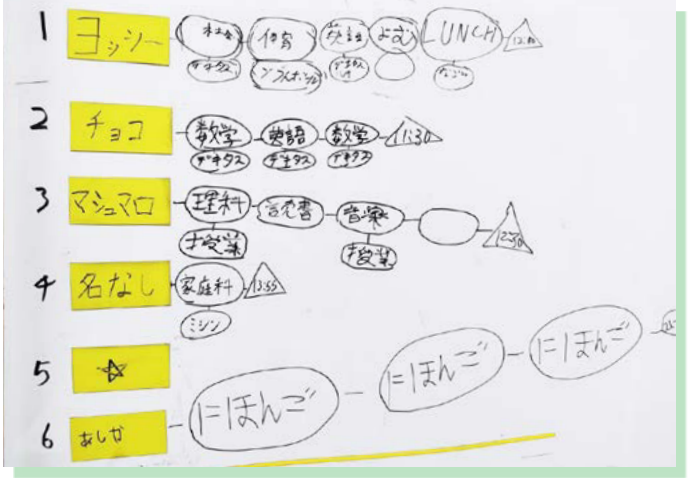
―「チーム鴨居中」を生んだ、オープンに情報共有し民間企業の力を借りる姿勢

課題解決の糸口となったのは、2019年度に横浜市教育委員会からICT教材「デキタス」を紹介されたこと。

「デキタスを活用すれば、和ルームの生徒や自宅で勉強したいと考えている生徒に、より効果的な学習サポートができるのはないか」。可能性を感じた齋藤校長は学習塾を経営し、デキタスを開発する株式会社城南進学研究社（以下、城南進研）や、学校のICT環境をサポートする株式会社JMC（以下、JMC）といった民間企業との連携を進めていきます。背景には、「学校だけではなく、世の中総ぐるみで生徒と向き合わなければならない」という齋藤校長の考えがありました。

（左）和（なごみ）ルームで学ぶ生徒の様子／（右）デキタスを使って学ぶ生徒の様子

※1　起立性調節障害とは、立ちくらみ、失神、朝起き不良、倦怠感、動機、頭痛などの症状を伴い、思春期に好発する自律神経機能不全の一つ。（東京都医師会学校精神検討委員会『学校精神保健に関する事例とその解説（4）』（平成31年3月））



登校時に「今日何を学ぶのか」を考え、ホワイトボードに記入

「1つの公立中学校でできることは限られています。私は赴任前に教育委員会に在籍し、さまざまな学校経営のあり方を見る中で、民間とうまく連携して世の中総ぐるみで課題解決に取り組んでいくことの重要性を感じていました。また、私たちがアクティブに動くことで、『企業の力をもっと借りたい』と考えている鴨居中学校の基本姿勢を世の中へ伝えていくことになります。さらに、日頃から学校の情報をオープンに公開しているので、困ったことがあれば企業の方へもすんなり悩みを打ち明けられるんです。」（齋藤校長）

齋藤校長をはじめとした鴨居中学校のオープンな姿勢は、民間企業へ大いに刺激を与えました。城南進研の水野氏も心を動かされた一人です。

「鴨居中学校の先生方は、課題や困りごとを率直に打ち明けて頼ってくれました。そのため、私たちはすぐに『この学校のために頑張りたい』という気持ちになりました。公教育の先生方は失敗が許されないプレッシャーを抱えていると思います。一方で民間には、生徒のために力を発揮したいと考えている事業者がたくさんいます。民間の知見を活用するために、困っていることがあればどんどん声をかけていただきたいですね。」（水野氏）

こうして立ち上がった「チーム鴨居中」には、輪番制で子どもたちを見守る先生たち、「デキタス」の導入を支援する水野氏など民間企業担当者、さらにはJMCの学習支援員も加わりました。「9時から17時まで、子どもたちの都合に合わせて大人がそばにいられる状況」を作り、放課後から登校したいと考える生徒にも柔軟に対応できる体制となったのです。

―「好きなこと」「やりたいこと」に取り組めることが、学校へ来る目的に

ICT教材「デキタス」ではアニメを用いた授業動画を見て、単元ごとにドリルを解き、学習内容を定着させていきます。水野氏は「教科書に対応したICT教材なので、学校の先生方にも安心して活用していただいている」と話します。

しかし、ICT教材を導入するだけでは生徒の学びは進みません。そこで、生徒に伴走し、デキタスを使った学習を含めた個別学習計画を作成しました。

まずは、和ルームへ登校した際に、「何を」「何時間目」に学習するのか、1日の流れを計画することから始めました。これは計画通りに進めることが目的ではなく、生徒が自分でスケジュールを考えることに意味があります。教員や支援員も生徒が「何をしているか」を理解しやすくなり、生徒への声かけがやりやすくなります。

また、生徒が希望した場合は、1カ月先~3カ月先を見越した中長期での個別学習計画を策定しました。これも計画を達成することが目的ではなく、生徒が「自分の好きな科目」「克服したい苦手教科」などを考え、自ら計画を立てることが重要です。個別学習計画の策定は、教員や支援員が生徒の「取り組みたいこと」を引き出すキッカケにもなります。

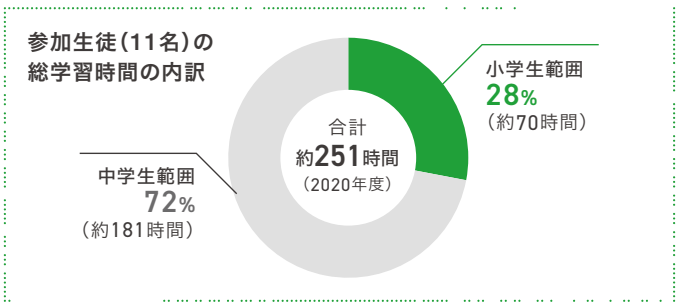
水野氏は、「一人ひとりの興味やペースに合わせることで、自信がつき、学ぶ意欲も引き出される」と語ります。生徒の多様な興味に応えるため、プログラミングや楽曲作成ができるICT教材を導入するなど、デキタス以外の学びの環境も整えました。

英語の個別指導を受ける生徒

「まずは『嫌いなことはやらなくていいよ、好きなことはなに？』と話す環境を作り、興味のある教科や分野をどんどん進めていきました。好きなことを無理なく学ぶことで、中学卒業後も学びが継続するための土台をつくれれば良いな、と考えました。例えば、興味のある生物を集中的に学んでいた生徒の場合は、次第に生物に限らず、理科全体を学ぶようになりました。今では、歴史など理科以外の教科にも学びが広がっています。」（水野氏）。

水野氏の考えに齋藤校長も同意します。

「『やりたいことをやる』ことは、学習に不安を持っていた生徒が『学校に来る目的を持つ』ことにつながるのだと思います。学校に来られない生徒は、教室での学習に対する不安を持っているケースが少なくありません。デキタスの



学習時間の約30%は、小学生まで戻っての学び直しに取り組んでいた[※2]

場合は自分の分からないところ、つまずいたところから自由に学び直せます。生徒が『この勉強がしたいから学校に行くんだ』という気持ちになれるのは、大きな変化だと感じました。」（齋藤校長）

―ICTを活用してアウトリーチの手段を多様化

とはいえ、すべての生徒が和ルームに来られるようになったわけではありません。学校に来られないままでいる生徒を、どのようにサポートしていくべきなのか。その課題と真正面から向き合っているのが生徒指導専任の中村教諭です。

「私たちは『学校に来ること』を前提とするのではなく、『生徒にとって何が最適か』という視点で保護者とのコミュニケーションを重ねています。保護者は、子どもの貴重な義務教育の3年間がどうなってしまうのか、大きな心配を抱えています。中にはあきらめの境地に達してしまっている保護者も。そこで『たとえばデキタスという手段もあります』と伝えながら、生徒と学校、保護者と学校をつなぐために動きました。」（中村教諭）

中村教諭をはじめとした先生たちは、なかなかやり取りができない保護者へも、何度も手紙を送るなどして粘り強くコンタクトを続けていきました。齋藤校長はこうした動きを支援すべく、グループウェアを導入してペーパーレス化を進めるなどの働き方改革を断行。先生たちが生徒や保護者とのコミュニケーションに時間を割けるようにしていったといいます。

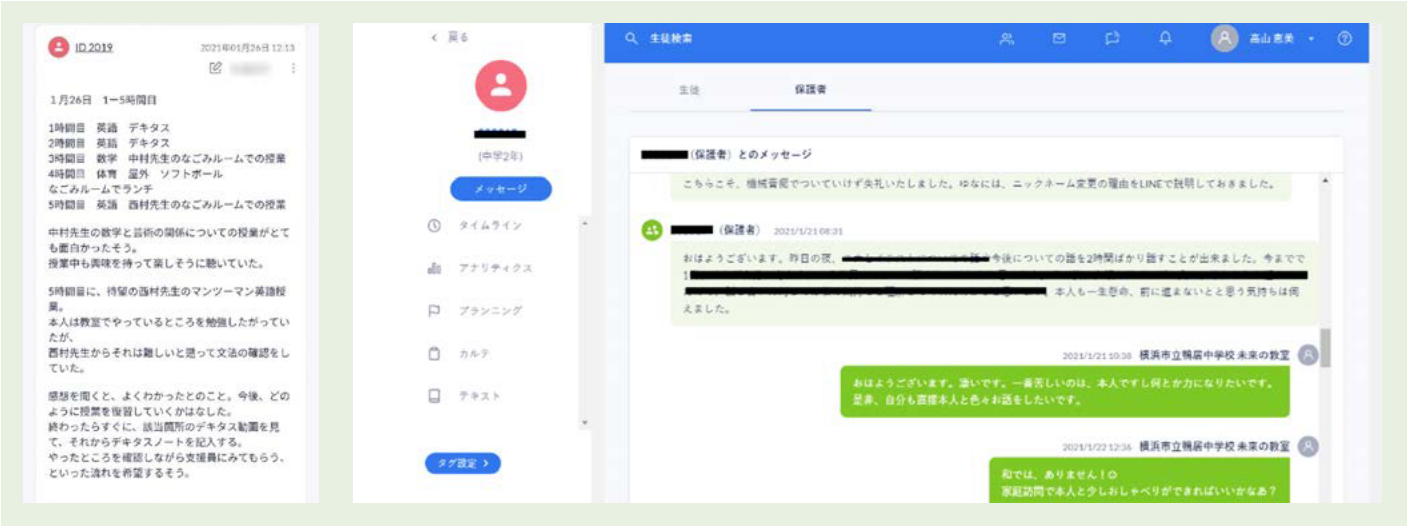
創意工夫の中には、スタディプラス株式会社が提供する「Studyplus for School（以下、スタディプラス）」もありました。スタディプラスには、生徒ひとりひとりの学習内容や健康状態などを「個人カルテ」として蓄積できます。また、学校・家庭・事業者がスムーズにコミュニケーションをするためのプラットフォームともなります。

「スタディプラスによって、生徒や保護者とLINEを使って直接やり取りできるようになりました。和ルームに登校できない生徒とは、面と向かっての話や電話は難しくても、スタディプラスでのチャットなら返事をくれる生徒もいます。また、保護者の方々へ時間を選ばず連絡ができるので、今までよりも支援の幅が広がりました。」（中村教諭）

さらに、和ルームに通う生徒の保護者を対象とした「多様な進路セミナー」も開催。広域性通信制高校やサポート校などの特徴や入学相談窓口をまとめた冊子を保護者に情報提供しました。こうしたアイデアは、アウトリーチの手段を広げる中で、保護者の本音や悩みを聞けるようになったからこそ生まれたものでした。保護者からは「自分で調べるだけでは分からなかった学校の情報も得られた」と喜びの声が上がりました。

―互いに話し合い、関わり合う生徒たちの姿

和ルームでは、「おしゃべり会」という話し合い活動を行っています。この話し合い学習には、学習支援員に加えて城南進研の担当者もファシリテーターとして参加。「将来の夢」などをテーマに、生徒たちが安心して話せる場作



（左）スタディプラスの生徒カルテ/（右）保護者とチャットで生徒の状況を共有

※2　デキタス学習ログ集計結果より

体育の先生とダンスを学ぶ生徒

りを行いました。自宅学習を続ける生徒はオンライン会議ツールで参加しました。生徒からは「普段聞いてもらえない話も、たくさん聞いてもらえる」と、おしゃべり会を楽しんでいた様子です。

また、生徒同士の関わりにも、うれしい変化が見られるようになったといいます。一般学級で学ぶ生徒の間でも、和ルームの生徒のことがよく話題に上るようになったのです。

「本校では毎週金曜日に学年ごとの情報交換会を行っていて、この場でもよく、和ルームの生徒の話題が出ています。『和ルームのみんなも頑張っているんだ』と共有されるようになりました。ある日、和ルームの生徒が『体育の授業に参加したい』と言ったときには、クラスの生徒が迎えに来てくれましたよ。」（齋藤校長）

―ICT×民間教育との連携で成果を収めた「鴨居モデル」

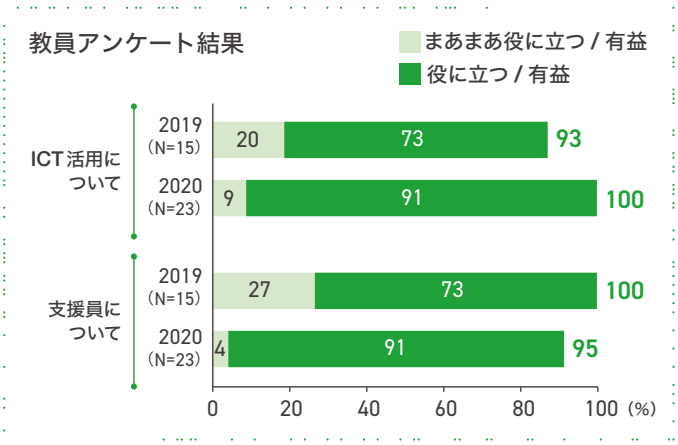
先生方の中には、教室以外の場所で学べるようになることで、生徒がますます学校に来なくなるのでは？との懸念があるかもしれません。水野氏は、「鴨居中学校では、別室学習を『教室に戻るためのステップ』とは考えていない」と念押ししながらも、取り組みを始めてから生徒の様子に見られた変化を語りました。

「教室外での学習により、学校への登校日数や時間が増加しました。なかには、教室へ通うことを希望するようになった生徒もいます。」（水野氏）

齋藤校長は「公立中にもできることはたくさんある」と語ります。また、「鴨居モデル」が成果をあげたのは、ICTの活用は前提の上で、民間教育との連携による『チーム鴨居』としての取り組みだったからだということを強調します。

「『教室に戻る気持ちがない生徒は別室を使えない』『先生が付けない時間は安全上別室を開けられない』という学校もあるでしょう。鴨居中学校では、学習塾を経営する民間企業と協力することで先生が付けなくても別室を開放できるようになりました。だからこそ形にこだわらず、生徒個々の学習のスタンスを応援できるようになったのです。」（齋藤校長）

これまでの取り組みを振り返って、水野氏は「実証事業で開発した『鴨居モデル』を多くの学校に広めていきたい」と結びました。



学校教員は和（なごみ）ルームに2年連続好感触を持っていた※3

記事で紹介した
実証事業の詳細はこちら

2019年度　2020年度

事業者名：株式会社城南進学研究社
公式サイト：https://dekitus.johnan.jp/business/

Vol.12　横浜市立鴨居中学校

1978年開校した横浜市の公立中学校。約500名の生徒と約40名の教員のもと、「一人ひとりの良さや思いを認め、個を大切にする温かい学校」「地域に開かれ、地域の教育力を活用し、共に歩む学校」づくりを目指し、教育活動を展開している。

※3　鴨居中学校教員アンケートより

1人1台端末と様々なEdTechを活用した**新しい学び方はこちら**　STEAM Library　EdTech ライブラリー　学校BPR　未来の教室通信

未来の教室ってなに？　経済産業省の有識者会議「『未来の教室』とEdTech研究会」では、新しい学習指導要領にもとづき2020年代に実現したい「今を前提にしない学びの姿」を、「未来の教室ビジョン」にまとめました。その議論の内容は、ウェブサイト「『未来の教室』の目指す姿」をご覧ください。

「未来の教室」通信
発行：経済産業省 商務・サービスグループサービス政策課 教育産業室　Tel: 03-3580-3922
Facebook: https://www.facebook.com/METI.learninginnovation/
公式サイト：https://www.learning-innovation.go.jp/　未来の教室 検索
記事の定期配信はこちら

和（なごみ）ルームについて

Vol.12

和ルームとは、個別学習を柱とした居場所づくりと、個に応じた支援と伴走の場づくりを目的とした学校内特別支援教室。将来は、一般化するであろう「未来の『普通教室』」の姿。鴨居中学校では、「1時間でも2時間でもいいから、教室以外の場所でも勉強できるように」との思いで作られた。

すべての子供たちに必要な理想的な学びの空間！

定員・広さ

定員　12名
（ブースデスク8名、その他4名）

広さ　30㎡

ICT環境

端末環境

iPad 10台

ネット環境

Wi-Fi 4台

ソフトウェア

教科学習	株式会社城南進学研究社「デキタス」など、多様なEdTechを用意
プログラミング学習	株式会社Playground「Playground」 合同会社デジタルポケット「ビスケット」
音楽制作アプリ	Apple社「GarageBand」
コミュニケーションツール	株式会社LoiLo「ロイロノート・スクール」 スタディプラス株式会社「Studyplus for School」

人員体制

9時から17時まで、子どもたちの都合に合わせて大人がそばにいられる状況を作り、放課後から登校したいと考える生徒にも柔軟に対応できる体制を構築

教員

- 生徒指導専任が特別支援コーディネーターを担当
- 全教職員が空き時間に来室

学習支援員※1

- 非常勤講師（年度途中で加配）：毎週月曜～木曜（週4回）9:00～12:30
- 民間企業（株式会社JMC）：毎週火曜・金曜（週2回）9:00～17:00

訪問支援員※2

- NPO法人教育支援協会南関東※3より派遣　1回90分

※1　学習支援員は、先生方と生徒の情報を共有し、指導方針を相談しながら、和ルームで生徒に寄り添い、学習指導を行う。
※2　訪問支援員は、先生方と情報共有・相談しながら、各家庭に訪問し、生徒や保護者との関係調整を行うと共に、生徒に寄り添った学習のサポートを行う。
※3　青少年の自立支援事業（不登校児童生徒自立支援事業）などを行うNPO法人。

個別学習計画について

鴨居中学校では、好きなこと・取り組みたいことを踏まえた個別学習計画を策定

策定方法

短期計画 1日単位 登校後

和ルームに登校した全生徒が、1日単位の個別学習計画を立てる

- 学習内容（「何を」「何時間目に」学習するのか？）と下校時刻を決める
- 1日の流れを各自ホワイトボードに記入する

中長期計画 1カ月〜3カ月単位 希望した生徒のみ

希望した生徒のみ、支援員・教員と共に作成する

- 計画を策定し始める前に、支援員及び教員との面談を行い、本人の「取り組みたいこと」を引き出し、書き出すことがポイント

生徒の変化： 個別学習計画で生活にも学びにも前向きに

Case 1 Aさんの場合

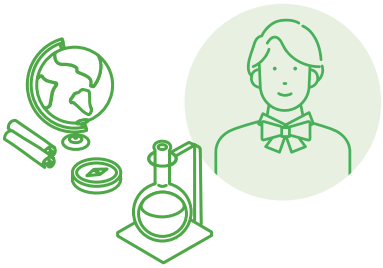
「高校になったら友達をつくって話したい」

- 1年次はほとんど登校できず。当初はアウトリーチと和ルームを併用。途中から和ルームへの登校回数が増える。
- 小学生の算数の学びなおしと英語を計画的に学ぶ。定期テストの受験も初めてチャレンジ。おしゃべり会で「高校になったら友達をつくって話したい」との感想を持ったことをきっかけに、同級生とのコミュニケーションにもつながった

Case 2 Bさんの場合

「他教科も積極的に取り組む意欲がわいた」

- 2019年度に理科の生物分野の学びが加速
- 2020年度はドリルの得点に目標をもって理科全分野の学びに昇華。他教科も積極的に取り組む意欲がわき、特に担任からの働きかけもあり歴史の学習が急加速



生徒の感想： 個別学習計画で学びへのモチベーションが向上

- 自分で計画を立てられたことが嬉しい。何とかして立てた計画を終わらせたい。
- 人に見られることなく、小学校の勉強にさかのぼれることがうれしかった。小学校にさかのぼるのは恥ずかしい気がするから。
- 「好きなこと（理科）」をやれるから勉強できる。もし苦手な英語の計画だったらこんなにできない。
- 実は、勉強好きなんです。成績あげてガンガンレベルアップしていきたいです。ここでの学びに出会ってから私の人生は変わりました。